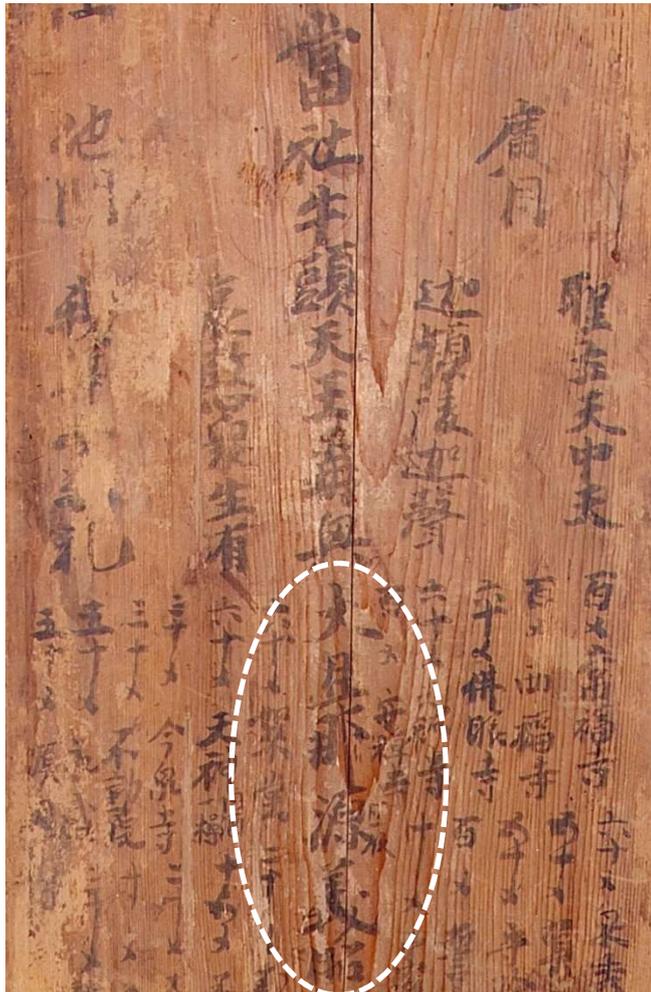


# 佐竹義昭の棟札（瓜連牛頭天王社再興）

那珂市歴史民俗資料館



＜棟札中に「大旦那源義昭」が読める＞

佐竹義昭が、永禄3年（1559）に瓜連牛頭天王社（素鷲神社）<sup>ごすてんのうしや</sup>を再興した棟札である。寺院や町衆がこぞって奉加していることは、瓜連が街道筋の宿として発展した姿をうかがわせる。また、義昭時代の史料は少なくこの時代を研究する上で大変貴重な史料である。（形状は縦約100cm強、横30cm強）

＜内容＞

- ①出資者「大旦那」は、佐竹氏の当主佐竹義昭。
- ②工事差配者（管理者）は、この地域を実際に治める地頭今宮大納言某である。今宮大納言の屋敷は現在の常陸太田市瑞龍に在った。①、②によって、瓜連の地に佐竹氏の勢力が及んでいたことを知ることができる。
- ③願主兵衛太郎は、天王社の神官西野兵衛太郎であろう。
- ④大工は、志津（静）村の某。
- ⑤棟札の裏面には「永禄三年庚申」「御遷宮」とあり、「番匠（大工）三百人」とある。
- ⑥助力者は常福寺、西福寺、佛眼寺、天祐寺、安善寺、如来堂、今泉寺、不動院、光明寺等。また寺門、高橋、萩野谷、大曾根、秋山など多くの在地有力者が寄進している。

＜解説＞

佐竹義昭は、天文14年（1545）4月、11歳で家督を相続し、20年後の永禄8年（1565）35歳の若さで他界した。義昭は、佐竹氏の内紛で100年間続いた「山入の乱」や、親兄弟が対立抗争した「部垂の乱」<sup>へたれ</sup>が終焉した後、宇都宮氏の内紛に関与して配下に加えて後北条氏と対峙し、さらに大塚氏<sup>だいじょう</sup>の相続問題にも関与して家政を掌握した。加えて近隣の額田・江戸・石神などの領主たちとの抗争も続いた。

このような中、家臣団の維持を含めて佐竹本家の体制を固めるためにも、父義篤にならって積極的に寺社の勢力をも取り組む努力をした。義昭は、天文15年（1546）と同22年の二度にわたって佐竹寺再興の奉加を命じ、弘治3年（1557）には部垂一族の鎮魂と地域の安定を願って甲神社（常陸大宮市）の再建に努めた。この時の家臣たちに助力を命じた奉加帳は同社に現存し、義昭および家臣団研究の数少ない貴重な史料として多用されている。

素鷲神社（瓜連）は、社伝によれば素戔鳴尊<sup>すさのおのみこと</sup>と建御名方命<sup>たけみなかたのみこと</sup>を祭神とし、大同元年（806）に創建された。後に素戔鳴尊が疫病退治の牛頭天王（薬師如来と同一視）と習合したことから、牛頭天王社と呼ばれた。明治維新の神仏分離策以降は素鷲神社と称された。